

## 緩和医療におけるスピリチュアルケア ー内科医・精神科医による心理臨床の実践から考える全人的ケアー

企画／司会者：大村哲夫（東北大学）

話題提供者：岸本寛史（静岡県立総合病院）

話題提供者：和田信（大阪国際がんセンター）

指定討論者：松田真理子（京都文教大学）

指定討論者：瀧口俊子（放送大学）

### 【本シンポジウムの趣旨】

C. Saunders は、がん患者のスピリチュアル・ペインに注目し、患者とその家族が人間として尊厳ある死を迎えるための近代ホスピスを創設した。

WHO は、緩和ケアの定義にスピリチュアルな問題を盛り込み（2002）、それは日本の厚生労働省のウェブサイトにも紹介されている。また日本の緩和ケアの提供体制においても、「身体的・精神心理的・社会的苦痛等の「全人的な苦痛」への対応（全人的なケア）を診断時から行うことを通じて、患者とその家族のQOLの向上を目標」（「がん対策推進基本計画」（第3期）厚生労働省2017）とある。

スピリチュアルケアの概念は医療界に浸透しつつあり、特に看護領域で関心が高まっている現状がある。一方、その一般的なイメージには「懸念」があることも否定できない。

本シンポジウムでは、緩和医療に携わる医師岸本寛史（静岡県立総合病院）とがん患者に関わる精神科医和田信（大阪国際がんセンター）が登壇、臨床現場における実践事例を報告する。

指定討論には、医療との連携の立場から松田真理子（京都文教大学）と、スピリチュアルケアに関心のある瀧口俊子（放送大学）が登壇し、司会を在宅緩和医療・ケアの経験があり臨床死生学なども講ずる大村哲夫（東北大学）が務める。討論を通して緩和医療におけるスピリチュアルケアの実像に近づくとともに、心理臨床の観点からその可能性と越えるべき課題を検討したいと考えている。

患者の抱える身体的、心理社会的、スピリチュアルな苦痛（WHO）に、私たち心理臨床家はどのように関わればよいのだろうか。クライアントに「全人的」に関わるということはどういうことなのだろうか。本シンポジウムを通して心理臨床の根幹に迫りたい。

### 【話題提供の概要】

岸本寛史は約20年前の進行性がん20代男性の事例を紹介する。がんが進行し、化学療法を継続するか、症状緩和を主体とした治療に切り替えるかの提案がなされ、気持ちの落ち込みが強くなっているとのことでお会いすることになった。当初は投げやりな印象もあったが、バウムテストの間に少し繋がることができたという感触を持たた。その後、岸本からの促しに応じて、夢を書いて持参されるようになった事例を報告する。

和田信の事例については当日紹介する。

両事例とも患者のプライバシーに最大限配慮して発表する。

### 【指定討論者から】

松田真理子は、「治癒」から「緩和」へと重点を移行していかざるを得ない状況におかれた患者とその家族の心の在り方を、医療と臨床心理学の観点から検討する。

瀧口俊子は、分析心理学および精神分析における臨床心理学の知見と実践のもとに、たましいのケア、すなわちスピリチュアルケアの立場からコメントを加える。

### 【参加者と共に】

コロナ禍の中、シンポジウムがオンデマンド開催となったことは、「対面の力」を実感している心理臨床の立場からはまことに残念である。しかしながら、全国津々浦々から参加が容易となり、時間的にも融通が利くという利便性の優位については認めざるを得ない。こうした状況を踏まえて、多くの参加者とともに「緩和医療におけるスピリチュアルケア」という課題を深めていきたいと思う。皆様の積極的なご参加を期待します。